

# 菩薩蛮考

越野美紀

開元・天寶時代の教坊（宮廷音楽署）のことを記録した唐・崔令欽『教坊記』<sup>(1)</sup>には、菩薩蛮をふくむ三六五曲の楽曲名が書き記してある。これは、菩薩蛮に関して信頼できる資料の中で、時代が一番古いものであり、ここから菩薩蛮曲は、おそくとも安史の乱（七五五年）以前には長安の教坊で奏されていたと言えよう。また、敦煌で発見された曲子詞には菩薩蛮も含まれており、ペリオ漢文文書三二二八の菩薩蛮詞は七六四〜八〇年の間に、スタイン四三三二の菩薩蛮詞は八〇二年以前には書かれている<sup>(2)</sup>というから、菩薩蛮は教坊で演奏されていた諸曲と同様に、安史の乱以後巷に流れ、唱いつがれて各地にひろまり、曲にあわせた菩薩蛮詞もまた各地で作られていたのであろう。

ところが、唐末・蘇鶚『杜陽雜編』卷下に次のような記載がある。

大中初、女蠻國貢雙龍犀、有二龍、鱗鬣爪角悉備。明霞錦、云鍊水香麻以爲之也。光耀芬馥着人、五色相間、而美麗於中國之錦。其國人危髻金冠、瓔珞被體、故謂之菩薩蠻。當時倡優遂製菩薩蠻曲、文士亦往往聲其詞。

大中の初め、女蛮國が二頭の龍犀を朝貢した。二龍で鱗、鬣、爪、角ことごとく備わる。明霞錦は水香麻を練

つて作るという。光耀き芳香が人に着き、五色相織りなして中国の錦より美しい。その国人は、髪を高く結び上げて金の冠をつけ、玉や宝石の飾りを身体に巻き付けていたので菩薩蛮とよんだ。当時の楽人は菩薩蛮曲を作り、文士もまた、あわせて菩薩蛮詞を詠じた。

李可及嘗教數百人、作四方菩薩蠻隊。(李可及はかつて数百人を教えて、四方菩薩蛮隊を作った。)

北宋・錢易『南部新書』戊にも『杜陽雜編』とほぼ同じ記載がある。この記述を信じるならば、宣宗の大中(八四七〜八六〇)の初めにも菩薩蛮の曲や詞がつくられたことになる。しかし、大中以前も以後も菩薩蛮はともに七七五五/五五五調で作られており、そのうえ菩薩風な外国人という仏教的な、非常に特徴のある名が付けられている。したがって、僅か五〜六十年余の間に、全くメロディーの異なる別の曲に同じ菩薩蛮という名を付けたとは考え難い。安史の乱で教坊から流れ出た菩薩蛮と旋律の特徴が非常に似通った曲を女蛮国がもたらし、それを当時の倡優が編曲しなおしたとみる方が自然ではなからうか。そして、宋・孫光憲『北夢瑣言』卷四に、宣宗は菩薩蛮詞を愛唱した。令狐相国は温飛卿の新作をかりてひそかに帝にさしだし、温飛卿には内密にといっておいたが、彼がすぐに人に話したので、令狐絢は温飛卿を疎んじた。とあるように、再び当世風の菩薩蛮曲が世に流れると共に、女蛮国の容姿やその曲風から士大夫にもはやされ、温飛卿に代表される濃艶な菩薩蛮詞が多くつくられたのではなからうか。温飛卿の現存する詞七〇首<sup>3</sup>ばかりのうち、趙崇祚が編纂した『花間集』には六六首が掲げられており、その内訳は菩薩蛮が全体の約二割強にあたる一四首、楊柳子八首、南歌子七首……と続いて温飛卿の詞の中でも菩薩蛮が極めて多く、またこれほど多くの菩薩蛮がとりあげられている者も他にいない。そこに展開するのは、艶麗でとろけるような、けだるさをも感じさせる、柔らかな男と女の情景である。宣宗の代に女蛮国が朝貢したのなら、温飛卿もその一行を目にしたのではなからうか。そして、官能的な魅力を漂わせた女蛮国人の曲も、ゆったりした雰囲気の音楽だっ

たのではなからうか。

そこで、献上品である双龍犀と明霞錦を手がかりにして女蛮国を調べてみよう。龍犀はおそらく非常に立派な犀を言い表したものであろう。明・李時珍『本草綱目』巻五一 犀に、「水犀」最も得難く、長短二本の角があり、皮に珠甲がある」と書かれ、正倉院御物（南倉）の平螺鈿背円鏡（へいらでんはいのえんきやう）には二本の角と鱗のある犀が対に配置されている。龍犀とは、貴重な二本の角を持つ犀だったかも知れない。いずれにしても、女蛮国とはこれらの犀の棲息する国か、その地を経て中国に入貢した国であろう。或いは、「鱗、鬣、爪、角ごとごとく備わる」龍犀とは美術工芸品であったかもしれない。それならば想像しうるどんな動物でも制作できようが、相当高度な工芸技術を持った国であったろう。

また、明霞錦は水香麻を鍊って作るというが、水香麻は『本草綱目』にも記載がない。唐・樊綽『雲南志』巻三 裳人に、趙呂甫は、「明霞、朝霞、明霞錦、みな朝霞錦の略称なり。」と注を付している（『雲南志校釈』一九〇〇・一四三―四頁）。明霞、朝霞は、『旧唐書』巻一九七 陀洹国（ラングーン）、『新唐書』巻三三二下 南蛮下の驃国、占婆（ベトナム）伝など、東南アジアの国々に白氈（木綿布）と並べて書いてあるのを見ると、明霞錦も木綿布だったであろうと思われる。ところが、木綿布はインドが原産地ではあるが、イスラム国が本場となり、中国では五代・宋初に至ってもはなはだ高価だった<sup>(4)</sup>という。宣宗の代には極めて珍しい品であった木綿布を、「中国の錦よりも美しい」明霞錦に織ることが出来た国は、唐に劣らぬ高い文化を誇った木綿の本場、イスラム国に近かったのではなからうか。

さらに、宋・樂史撰『太平寰宇記』巻一七九 占城国には、「（九五八年）その王が入貢した物の中に灑衣薔薇水、…があった。西域の産だという。およそ色鮮やかな衣にこの水を灑そそげば、よい香りを発し、強い香りで長い間やまな

い」とある。「芳香が人に着く」明霞錦は、この薔薇水をそそいで香りを付けたものではなからうか。中国にも佳香を焚きしめ衣服をかぐわしくする薫炉（香炉）はあったが、薔薇水はペルシャ湾沿岸地の特産で、中国を中心とする

東アジアの「沈香」の香料とは異質のものである。<sup>(5)</sup> また、金の冠をつけ、瓔珞を身体にまとう国は、当時の史料に残る南蛮伝に該当する国が多い。<sup>(6)</sup> しかし、元・劉郁『西使記』に、「海の西に富浪国（注・フランク王国）あり。婦人の衣冠は画く所の菩薩のようだ。」とあるから地域は特定できない。ただし、「菩薩蛮とよんだ。」から、その女蛮国人は、唐代の絵画や彫刻にみられる菩薩のように豊満な体つきで、一種の畏敬の念を抱かせたのではなかったかと想像する。

以上より、蘇鶚の女蛮国に関する記事は信ずるに足りないという説もあるが、<sup>(7)</sup> 当時の記録と矛盾するものではなく、その朝貢品などから、女蛮国は、海を渡り東南アジアを経由して、当時盛んにやって来たムスリム商人と関係が深いと考える。女蛮国が入貢した大中の初めは、ウマイヤ朝に代わってアッバース王朝の黄金時代を築いたハールーン、マームーン（在位八一三—三三）父子の治世後にあたる。女蛮国人は官能的で魅惑的な踊り子であったからこそ「濃艶な美人の寝みだれ姿などを写して、きわめて甘くまた柔らかい」<sup>(8)</sup> 菩薩蛮詞が、宣宗の代に盛んに詠じられるようになったのではなからうか。あるいは、女蛮国とは商売上手なムスリム商人が取引をスムーズに行うために連れてきた、ペルシャの舞姫だったかもしれない。更に言えば、彼女たちは途中の寄港地、占城（チャムパ）<sup>(9)</sup> で買ってもよいし、またその方が便宜である。舞姫に近く南蛮女が混じっていたから、蘇鶚が女蛮国と形容したのかもしれない。

二

任二北『敦煌曲初探』では菩薩蛮は驃国の音楽であろうという。<sup>(10)</sup> その根拠の一つは、唐・許棠『奇男子伝』（馮夢龍編『五朝小説』『唐人百家小説伝記家』第二二）、李昉等編『太平広記』卷一六六「具保安」、及び『新唐書』卷一九一具

保安伝の記述を歴史的事実と見て、菩薩蛮という南洞が登場するからという。話の梗概は以下のごとくである。

唐の宰相郭元振の甥、郭仲翔は姚州都督李蒙の部下となったが、南蛮との戦いで李蒙は死に、自分は捕虜となつてしまった。仲翔は仕官の口を求めていた呉保安に、逆に身代金の絹千匹を用意してくれるよう依頼の文を出した。ところが、頼みの郭元振もすでに亡くなり、貧しい呉保安は絹千匹を調達するために日夜奔走する。一方、仲翔は南洞から南洞へと転売されて苦役を強いられていたが、その南洞のひとつは菩薩蛮洞と号した。やがて、姚州に戻る事ができた仲翔は、蛮洞で美女一〇人を買ひ、助けてくれた姚州都督の楊安居に贈つたが、楊安居はひとりしか受け取らなかつた。十年後、都に戻つた仲翔は呉保安の恩を忘れず、保安の子に仕官もさせてやつた。

主な登場人物は郭元振、郭仲翔、李蒙、呉保安、楊安居の五人である。郭元振は『旧唐書』『新唐書』に本伝をもつ、睿宗の代の宰相で、『新唐書』卷一二二列伝四七に、「郭震、字は元振、：新州に流された。開元元年、道中で病により卒す、年五八。」とあり、『旧唐書』卷九七、及び『資治通鑑』卷二一〇には同じく「新州に流された。」とあるが、卒年の記載はない。郭仲翔が南蛮の捕虜となり、身代金の調達を頼んだ時は、元振はすでに亡くなつていたから、南蛮に郭仲翔が捕まつたのは開元元年以前とおもわれる。郭仲翔は、『新唐書』呉保安伝に記載があり、同卷七四上宰相世系表四上にもその名が見えるが、『旧唐書』には記載がない。李蒙は、『新唐書』呉保安伝に、「睿宗の時、姚・巂の蛮が叛いて、李蒙は姚州都督をたまわつた。」とあり、同書卷五玄宗本紀には、「開元元年十月、姚・巂の蛮が姚州を寇し、都督の李蒙が死んだ。」とあるが、これらの記載は『旧唐書』『資治通鑑』には見当たらない。ところが、同じ『新唐書』卷一九九徐堅伝には、「睿宗が即位し、：時の監察御史の李知古の兵が、姚州泐河蛮を撃つてこれを降した。：蛮は惧れて李知古を殺した。姚・巂の路が数年間不通になつた。」とあり、同じく卷二一六上

吐蕃伝上には、「監察御史の李知古が姚州の蛮を討つことを建議し、…(蛮酋は)知古を殺し、屍を以て天を祭り、蜀漢に侵攻した。」と、同じ事件を記す。それはまた『旧唐書』卷一〇二徐堅伝、同卷一九六吐蕃伝上、『資治通鑑』卷二一〇睿宗景雲元年(七一〇)十二月の条の記載とほぼ一致する。つまり、『新唐書』呉保安伝と、同玄宗本紀の記載は、『新唐書』以外の他の史書にはみえない。一方、李知古が、姚州の諸蛮を撃つて殺されたという記事は、『新唐書』徐堅伝、同吐蕃伝上、『旧唐書』徐堅伝、同吐蕃伝上、『資治通鑑』卷二一〇にみえるのである。したがって、睿宗が即位した七一二年前後に姚州の蛮を討ちに赴き、蛮に殺された人物は李蒙ではなく、監察御史の李知古だったと考える方が妥当であろう。翌七一三年は玄宗の開元元年にあたり、郭仲翔が南蛮に捕らえられたときには、郭元振は亡くなっていたという『奇男子伝』の内容とも大筋で合致する。また呉保安と楊安居のふたりは、前述の『新唐書』呉保安伝にみえるだけで、他の資料に見当たらない。<sup>(12)</sup>以上から、『奇男子伝』は大筋で事実を基としているものの、人物などに虚構も含んでいると考える。

さらに、白鳥芳郎『華南文化史』は、洞蛮として『新唐書』卷二二二南蛮伝の西原蛮をとりあげて、「これらの種族は当時、洞蛮、洞獠として知られ、黄洞、濃洞とも称され、山険洞穴に拠る獯猛な山地民族である。」と述べる。<sup>(13)</sup>西原蛮は今の広東・广西壮族自治区あたりに居住していた南洞蛮であり、元稹は「和楽天送客遊嶺南二十韻」(『全唐詩』卷四〇七・元稹十二)の一部に、この南洞蛮を以下のようにとりあげている。

船主腰藏寶<sup>(1)</sup>

船主、腰に宝をかくし

(原注(1))

南方では波斯を船主と呼ぶ。胡人は異宝を多くふところに隠して、強引に物ねだりをする者を避けた。

黄家砦起塵<sup>(2)</sup>

黄家の砦はつちけむりをあげる

(原注(2))

南方の夷蛮の集落

歌鐘排象背

歌鐘を象の背にならべ

(原注(3))

夷蛮たちは大いに宴を張る。則ち、巨象の背で音楽を演奏

炊爨上魚身<sup>(3)</sup>

魚の上で飯を炊く

し、大魚は浮かんで州か島のような。海の男はその傍らに舟を泊めて、その上で飯を焚くが、魚はそれを感じない。

元稹が、ここで対にして詠じている船主（波斯のムスリム商人であろう）と黄家（西原蛮リーダー）の様子は、嶺南ではありふれた光景なのであるうか。そして、西原蛮とムスリム商人とは当然接触（強奪などもふくめて）があつたであらう。また、李賀は「黄家洞」と題する詩で、元和十一年（八一六）の黄洞蛮の反乱を詠じており、兵部侍郎韓愈は「黄家賊事宜状」を長慶元年（八二一）に奉って、その賊みな夷獠の種族にして、また城壁なく、山のかたわら、険しい場所に住居し自ら洞主と称している。と書いて<sup>(14)</sup>いる。これらから察するに、元和の反乱などで黄洞蛮は、山陰洞穴による瘴悪な山地民族として都に知られていたと思われる。『奇男子伝』では、南洞の洞主は嚴悪で、仲翔をひどく鞭打ったりした。とか、別の洞主は、郭仲翔の逃走を怒り、長い板に足を釘づけにして仕事に行かせた。とある。許棠の描く南洞蛮は、驃国や雲南ではなく、この嶺南に跋扈する瘴悪な黄洞蛮だったのでなかろうか。そして、

菩薩蛮 関連表

唐代

睿宗 712頃	李知古，洱河蛮を討つ	
玄宗 714	教坊できる	
755	安史の乱 崔令欽『教坊記』	
746 780	S 3128 菩薩蛮詞 (七七五五／五五五五調) ↑	
802	P 4332 菩薩蛮詞	
801 802	驃国献楽 (白楽天楽府「驃国楽」)	
816	黄洞蛮（西原蛮）反乱 李賀「黄家洞」詩 元稹・嶺南詩	
821	韓愈「黄家賊事宜状」	
宣宗 847	(大中) 女蛮国来貢，菩薩蛮曲 菩薩蛮詞 (七七五五／五五五五)	温飛卿 (812?) ↓ (872)
懿宗 863	(咸通) 洱河蛮，交州城に迫る 李可及，菩薩蛮隊舞の振付け 許棠『奇男子伝』	
872	.....	
885	蘇鶚，進士となる 『杜陽雜編』女蛮国	
北宋 1119	朱彧『萍州可談』 蕃婦菩薩蛮と呼ばれる	

郭仲翔は幾度も南洞を転売されているが、菩薩蛮洞以外の他の洞蛮には名がついていない。これは何故だろうか。

表のように、許棠は、温飛卿が活躍した時期や、菩薩蛮詞が士大夫の口端にのぼり、李可及が菩薩蛮隊舞を振付けた時期と重なっている。<sup>(15)</sup> 女蛮国は南海を渡って入貢してきた南蛮である。南洞のひとつだけに菩薩蛮と命名し、郭仲翔が洞蛮で美女十人を買って、姚州都督に贈ったとあるのは、当時の状況からみて、許棠が菩薩蛮の名を借用して、話に彩を添えたものと推測できる。あるいは、美女十人とは、女蛮国人そのものを言ったものかも知れない。したがって、『奇男子伝』は歴史的事実そのものではなく、許棠が、睿宗の時の姚州諸蛮征伐の出来事に、洞獠と世に知られた西原蛮や、当時評判の女蛮国の菩薩蛮の名を採り入れて書きあげた一種の忠義伝と考えられよう。

また明・胡震亨『唐音癸籤』卷一三「菩薩蛮には、『杜陽雜編云』として女蛮国の記載を挙げて、『驃国がその樂を献じた際、楽人の金冠や耳飾り等の裝飾が女の飾りのようであり、驃国が女王国の西南にあることから、当時、あるいは驃国を女蛮国としたかもしれない。また、その樂曲の多くが仏曲なので菩薩蛮と称したものであろう。』と記されている。貞元一七年（或いは一八年）に、驃国王は、劍南四川節度使の章阜が作製した南詔奉聖樂と国樂を徳宗に献じた。その内容は『新唐書』驃国伝に、非常に詳細に記載されており、当時の士大夫の耳目をあつめた出来事であったろう。が、八〇一〜二年では女蛮国来貢の大中の初めと約五〇年の開きがあり、驃国は八三二年に南詔に民三千人を拉致されて、その後滅んでいる。そして、つぎにあげる白楽天の「驃国楽」の一部はこの献樂の盛んなさまを詠じたものである。

玉螺一吹椎髻聳

美しいほら貝を一吹きすれば 後で束ねた髪はそばだち

銅鼓千擊文身踊

銅の陣太鼓を打ち鳴らして 文身いれずみが踊る

珠纓玄轉星宿搖

真珠のかざりひもはきらめいて 星座の揺れるよう



花鬘斗藪龍蛇動

季節の花かざしは揺れ動いて 龍蛇の動きのよう

この描写は『新唐書』驃国伝の記載とも合致し、リズムカルにおどりまわる楽しさや、力強さ、軽快さが感じられる。これは、温飛卿の菩薩蛮詞にみられる情感あふれる艶やかで豊満な世界とは程遠く、温飛卿の詠じる菩薩蛮曲と、この曲が同じメロディとはとても考えられない。<sup>(16)</sup> 温飛卿の菩薩蛮詞には逆にスローテンポの、けだるい雰囲気曲でなければなさない。これらの事から、菩薩蛮が驃国音楽とは考え難い。

三

一方、時代は下がって北宋末、徽宗宣和元年(一一一九)に記された朱彧『萍州可談』巻二に、「樂府に菩薩蛮があるが何物かわからなかった。広中では、蕃婦が菩薩蛮とよばれるのでその訳がわかった。」とある。この蕃婦とは外国人の居留地・蕃坊に住む波斯婦(イスラム教徒の婦人)であり、イスラム教徒を意味するペルシャ語 *Musliman* の音訳であると同時に、婦と特定している処から、耳輪や首飾りで飾りたてたイスラム婦人に、菩薩蛮という文字をあてた<sup>(17)</sup>と思われる。ムスルマン(マホメッドに忠誠を誓う者を指すアラブ語ムスリムのペルシア語の複数形が、外来語として単数形で取り入れられて定着したもので、マホメット教徒を指す)は、木速蛮(元史巻五) 木速魯蛮(新元史巻二九表三) 没速魯蛮(烏古孫仲端『北使記』)など種々の形で写されているが、この菩薩蛮という漢訳は、『萍州可談』だけに見られる。そして、この菩薩蛮と、長春真人『西遊記』巻上にある、東からパミールを越えた最初の都市、天山北路の要地アルマリックの舖速満国王だけはpで始まり、他のmで始まる訳語と異なっている。さらに、ロシアのプレトシュナイダーは『東亜の史料に拠れる中古の研究』の中で、『西遊記』の舖速満の訳注に、「これは多分カルピニの書いている *Biser-mini* (ムスルマンのなまった形)と同じであろう。…古代のロシアの記録には *Bussurman* という語はしばしば記述さ

れており、それは常にムスルマンを意味するものである。”と書いている<sup>(18)</sup>。そして、ドイツのヒルトは『CHAU JU-KUA』の“foreign (蕃)”の注で、“彼ら「ムスリム」の婦人はムスルマン、また中世ロシア年代学者の言う Bussurman や、カルピニの言う Bisermin の漢音訳である P'u-su-man (菩薩蛮) と呼ばれる。”と書いている<sup>(19)</sup>。このイタリア人プラノーカルピニのジョンが二三世紀中葉に旅行した記録を訳した護雅夫『中央アジア・蒙古旅行記』(『東西交渉旅行記全集I』桃源社・一九六五・一〇二、一一二、一二七頁参照)では、「ビセルミン人」の訳注に、“イスラム教徒をしめす「ムスルマン」のなまり。ただし、ここの「ビセルミン人」とは、イスラム教徒一般を指すのではなくて、ある特定地域のイスラム教徒をしめすのであろう。…その土地は、おそらくは、ハーリズム王国(注・ホラムズ・シャー朝と呼ばれ、一〇七七〜三二二年アム川流域一帯を統治した)の故地、西トルキスタンをさす”とある。

これらは宋・元代の記録であるが、七世紀前半にはイスラム教はメッカに生まれ、<sup>(20)</sup>『ロシア語源辞典1』によると、ツキルギス、カザフではブスルマン。BuはMuの異化によって出来た。チュルクの方言が Busurman、トルコは、Musurman とある。したがって、チュルクの地にムスルマンという言葉が流入した当初から、ブスルマンと訛った可能性もあろう。一〜三世紀にこの西トルキスタンを支配したのは、ガンダーラ仏教美術の興隆に極めて大きな貢献をなした中央アジア出身のイラン系遊牧民のクシャン族であり、その後、西トルキスタンを支配したのは、イラン系遊牧民のエフタル族である。そして、六五一年にイスラム軍はササン朝ペルシアを滅亡させてイランの征服を完了しているが、もともとその地域は仏教とも深く関わっており、漢代に仏典をもたらし、漢訳したのはまさしくその西トルキスタン、中央アジア出身の僧侶たちである。白皙緑眼、深目高鼻、そして巻髪のパルシア系西域女性が着飾れば、それはまた官能的な美に満ちて、西方の菩薩を連想させたのではなからうかと想像する。田坂興道『中国における回教の伝来とその弘通』<sup>(21)</sup>によれば、“ウマイヤ王朝の入貢は”海路をより多く利用した次のアッパース朝に比す

ると、…陸路を利用した場合が多いと思われ、アラブ帝国と呼ばれたウマイヤ王朝の唐室へ入貢した回数天宝六年までに十七回を数える。」という。陸路を利用した遣使と共に、その通過する先々に有形無形の文化が流れ込み、浸透して行ったことであろう。また、胡人出身の音楽家が唐の宮廷に重んぜられていた事は、桑原隲蔵「隋唐時代に支那に來住した西域人について」、向達『唐代長安与西域文明』「五西域伝来之画派与樂舞」等に明らかである。開元・天宝時代に、ブスルマンなるイスラム教徒が、長安あるいは中国に住んでいたという事ではなく、アラブ人のイラン征服によって中国に多くのイラン人が流入しており、西域から訪れる商賈や胡人音楽家からブスルマンの音楽が長安に流れ込んで来た。そして、その言葉の意味する所を知らなかったからこそ、Busurmanの漢訳に菩薩蛮の文字を当てたのではないだろうか。そして、唐代においてブスルマンの曲を菩薩蛮と名づけたからこそ、北宋の末に、樂府の菩薩蛮と同じ旋律の音楽を持ち、Musliman と呼ばれたイスラム教徒の婦人を、朱彧が菩薩蛮と漢訳したとは考えられないだろうか。

以上より、『教坊記』に載る菩薩蛮は、当時はアラブ帝国と呼ばれたウマイヤ王朝に隣接し、ムスルマンを訛ってブスルマンと呼んだ中央アジアのチュルク人を介して、陸のシルク・ロードを渡ってきた、西域のイスラム圏に流れる旋律の曲につけられた名であり、時代は下がって約一〇〇年後、大中の初めの菩薩蛮は、イスラム帝国と呼ばれたアッバース王朝のもと、南海のシルク・ロードを渡って中国にやってきた、ムスリム商人と関係が深い女蛮国<sup>(21)</sup>がもたらした曲の可能性が高いと考える。したがって、いずれも菩薩蛮曲の源はイスラム圏のペルシャ系の音楽と推測できる。たとえば、両者はまったく同じ旋律でなくとも、イスラム圏の音楽だったからこそ、中国に於いて特徴のある同じ名、菩薩蛮と名づけられたのであろう。そして、『教坊記』にある菩薩蛮は、その意味するところの分からぬまま用いた Busurman の音訳であり（或いは同地から流寓して踊りや歌を披露した胡姬、イラン系美女の容姿とも深い関

係があるかも知れない)、唐末大中のそれは、海を渡って朝貢したムスリム商人と関係が深い美しい舞姫の、菩薩を思わしめる容姿から名づけられたものと考ええる。朱彧が蕃坊で蕃婦が菩薩蛮と呼ばれるのを見て、楽府の菩薩蛮の訳が分かったと『萍州可談』に書いたのも、イスラム教徒の婦人と、菩薩蛮の曲や詞との関連性から首肯しうるものだったからであろう。

注

- (1) 岸辺成雄『唐代音楽の歴史的研究』上「教坊」(東大出版会、一九六〇・四三四～六頁) 参照。
- (2) 『講座敦煌9・敦煌の文学文献』「(4) 曲子詞類」金岡照光(大東出版社、一九九〇) 参照。
- (3) 村上哲見『宋詞研究』(創文社・一九七六・一一九頁)、青山宏『唐宋詞研究』(汲古書院・一九九一・三頁) 参照。
- (4) 桑原隲蔵『東洋文明史論』「アラブ人の記録に見えたる支那」(東洋文庫四八五・一九三四・二二二～八頁) 参照。
- (5) 山田憲太郎『東西香藥史』(福村書店・一九五六・三二九、四九〇頁)、同『香料の道』(中公新書・一九八一) 参照。
- (6) 『新唐書』卷二二二下南蛮下には、「環王、…また占婆という。…王は白疊を着て古貝(吉貝とも書きパンヤノキ。日本では木綿とも書く。)を斜に臂にまとい、金を繫いだ紐で飾り、髪に金華冠を載せているのは、儒者の冠のようである。妻は朝霞と古貝の短いスカートを着て、冠や飾り紐は王の如し。」とあり、『冊府元龜』卷九五九には、「林邑、…(吉貝を)五色に染め、織って模様のある布を作る。…又その王は法服を着け、纓絡を纏って仏像の飾りのようだ。」、卷九六〇には、「波利国、…王は纓絡を身体に繞い、頭に金冠をつける。」とある。
- (7) 清末・況周儀『蕙風詞話』卷四、任二北『敦煌曲初探』二四三頁(上海文芸聯合出版社・一九五四)。
- (8) 倉石武四郎『中国文学史』「菩薩蛮」(中央公論社・一九六〇・七三頁)。
- (9) 桑原隲蔵『蒲寿庚の事蹟』、及び田坂興道『中国における回教の伝来とその弘通』には、唐の中世以後、南海地方にアラブ商人が設定した商業根拠地として、華南に最も近かった占城をあげてある。杉本直治郎『東南アジア史研究Ⅰ』(叡南堂・

一九六八・九八、一六九、六七六（七頁）によれば、チアムパは、…少なくとも七世紀以後は南インドの影響が大であった。仏教の影響を古くから受け、文化的にも高いものをもっていった。”という。また、占城初期の首都チャキユウ（八世紀中頃）一〇世紀）出土のリング台座を飾る浮き彫り（一〇世紀）には、女蛮国の描写に似る、髪を高く結って金冠をつけ、纓絡を身体に繞った、優雅な雰囲気があったよう舞女が彫りつけられている。高田修『印度・南海の仏教美術』（創芸社・一九三五・二二七～八頁）には、チャンパーで最も古い遺品は、…写実の妙を得、生氣に満ちており、”とチャンパーの工芸技術の高さを述べ、”印度・南海・支那の海上貿易の要衝を占めていた関係から、…金・銀・銅などの金属が豊富で金工技術も相当進んでいたのに相違ない。”とある。

(10) 任二北『敦煌曲初探』（二四三～四五頁）は、”この調の起源は、唐よりすでに三説あり、”として、(甲) 胡震亨の驃国楽説や白楽天「驃国楽」、及び徳宗建中初年（七八〇）にすでに菩薩蛮辞があったことから、『杜陽雜編』は、信じる事はできないとしている。(乙) 中村久四郎、桑原隲蔵等のムスルマンの音訳説を、”回教と唐代の菩薩蛮曲名が仏教に縁がある事とははつきり別物だから、どうして混同できようか!”と否定する。(丙) 楊権益『零墨新箋』の「菩薩蛮」を「驃苴蛮」或いは「符詔蛮」の異訳とする説を挙げ、『教坊記』、『奇男子伝』、敦煌S四三三二等の資料からも事実に近いとする。ここで、(甲)については『唐会要』卷三三に、”驃国楽、…中国の柘枝舞の類だ。”と記し、岸辺成雄『唐代音楽の歴史的研究』下（三一八頁）に、”韋阜の作った南詔奉聖楽は、…その内容は全く唐土の燕饗雅楽であり、外来楽とは関係がなく、”とあり、林謙三『唐代の楽器』（音楽之友社・一九六八）に、”驃の音楽は唐に貢献されたものを通じてあきらかに印度系であり、”とある。そうならば、驃国楽自体に新鮮さはない。(乙)の桑原隲蔵は、はつきり、”宋代の菩薩蛮の名称の解釈”とことわって、”唐代の菩薩蛮の解釈不能”としている。(丙)の楊権益は、女蛮国は下緬甸にある羅摩国とする一方、雲南の濮曼族を菩薩蛮の異訳としている。

(11) 佐藤長『古代チベット史研究上』（東洋史研究会・一九五八・四二七～三〇頁）では、李知古の事件を年代的には矛盾がないとして、中宗の景龍元年（七〇七）と認定している。

- (12) 『新唐書』 吳保安伝は、牛肅『紀聞』から採ったという指摘がある。(吳志達『唐伝奇入門』日中出版・一九八五)
- (13) 「四、広西土司の種族出自と史的背景」(大興出版、一九八五・三八九、四五三頁) 参照。
- (14) 『全唐文』 卷五五〇。『新唐書』 卷二二二下西原蛮伝にも「長慶の初め(穆宗八二年)……」と同じ文が続く。
- (15) 宋・王謙『唐語林』 卷七に、「許棠、初めて進士を試すに、薛能(八一七〜八〇)、陸肱と名声が齊しかった。」とあり、『新唐書』 卷一七七・高鉞伝に、「咸通の末、…棠、字は文化、皆當時有名だった。」とある。
- (16) 『唐代の楽器』「方響雜考」(一一〇頁)で、林謙三は「白氏の楽府はもともと徹頭徹尾驪国楽舞の映じたままを筆にしようとしたのではなく、漢人として常識的な蛮夷楽舞を描いたまでと見る。」とするが、白楽天はその年に校書郎を授けられており、おそらく実際に驪国楽を見たと思われる。よって、舞の雰囲気は詠じられている様子に近いと考える。
- (17) 桑原隲蔵『蒲寿庚の事蹟』二、支那居留の大食商賈」参照。南宋初期・莊綽『鷄肋編』 卷中に「広州の波斯婦は耳の回りに皆穴をあけて環をつけ、それが二十余枚の者もある。」とある。『蒲寿庚の事蹟』注(17)〜(20) 参照。
- (18) "MEDIÆVAL RESEARCHES From Eastern Asiatic Sources" by E. BRESTSCHNEIDER. M. D., LONDON KEG-ANPAUL, TRENCH, TRUBNER & CO., 1910, vol. 1, p. 70.
- (19) ≈CHAU JU-KUA (趙汝适)≈ [the author of the Chu-fan-chi (諸蕃志)] by FRIEDRICH HIRTH and W. W. ROCKHILL The Imperial Academy Sciences, 1911, p. 16. (趙汝适は、南宋寧宗の嘉定間の人。福建路市舶提举官となる。)
- (20) M. Фасмер "Этимологический словарь русского языка" Издательство «ПРОГРЕСС», 1964, стр. 251.
- (21) 『世界文化史大系④』 岸辺成雄「イスラム教と音楽」(一五四〜八頁)、『東洋学術研究』 第八卷第四号 前嶋信次「唐文化とイスラム文化」(一九七〇)、前嶋信次『東西文化交流の諸相』「バグダードの文化とその滅亡」(三一七頁) 参照。